

CeMI 気象防災支援・研究センター
News Letter

Contents

1. トカラ列島悪石島近海で活発な地震活動
～震度1以上2200回を超える
2. ため池の危険
3. 気象庁ホームページは「宝箱」

1 トカラ列島悪石島近海で活発な地震活動 ～震度1以上2200回を超える

鹿児島県のトカラ列島の悪石島や小宝島付近では、6月21日から地震活動が活発になり、悪石島では7月3日に震度6弱を観測したほか、震度5強を3回観測するなど活発な地震活動となっています。

7月21日までに悪石島で震度5弱以上を観測した地震が7回発生、悪石島の南西約40kmに位置する小宝島でも7月2日に震度5弱を観測する地震が発生するなど、一連の活動で震度5弱以上を観測した地震が8回、震度1以上を観測した地震は2200回を超え活発な活動が続いています。

悪石島付近では、これまでも時々まとまった活動があり、最近では、2023年9月、2021年12月、2021年4月などに活動がありました。これら過去の地震発生域と今回の地震発生状況を重ねた図1から分かるように、今回の活動は

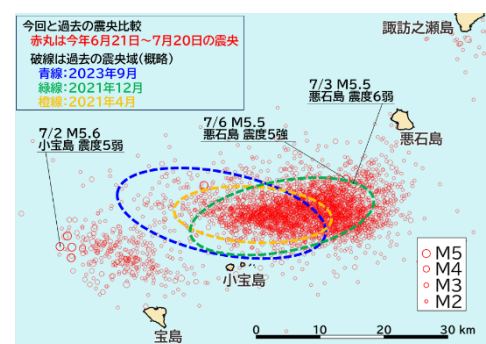


図1 今回と過去の震央比較

動は終わっていますが、今回の活動は1か月が過ぎた現在でも活発な活動が続いています。

このように、今回の活動は、これまでの活動に比べて広い範囲で発生していること、長い期間活動が続いていることに加えて、地震の発生する場所が比較的悪石島に近いことなどから、震度1以上を観測する地震が多いものと考えられます。

この地域の地震活動の原因については、専門家から様々な考えが示されています。その一つが、トカラ列島は、霧島連山や桜島から連なる火山帯でもあることから、火山活動に起因するものがベースにあるとの考えです。また、この地域特有の複雑な海底地形によるという考えもあります。

このような地震活動の要因分析や今後の予測には、地震発生の状況や地殻変動などの観測データが必要ですが、島嶼部では地理的な制約から観測機器を設置する場所が限られるため、陸域に比べて十分な観測データが得られない現状があります。観測体制の強化が望まれるところです。

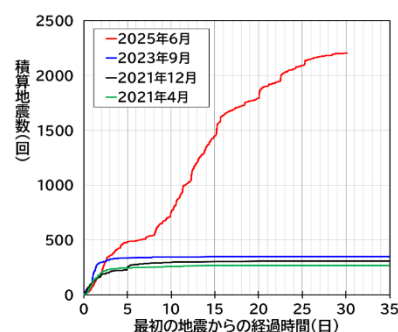


図2 震度1以上を観測した地震数の比較



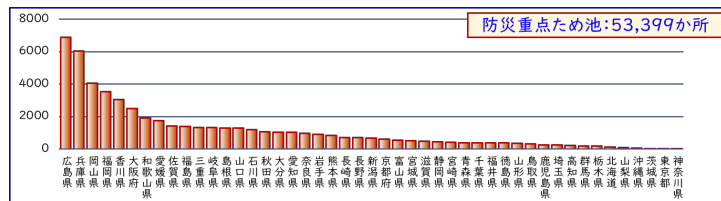
2 ため池の危険

愛知県の北部、岐阜県に近いところに入鹿池があります。ため池としては香川県にある満濃池と並んで規模の大きな池として知られています。この入鹿池では明治維新の年、1868年7月に梅雨末期の大雨により池の堤体が決壊して、下流の多くの村々が濁流に襲われて941人も犠牲が出ました。日本におけるため池災害としては最大のものです。

最近、ため池の災害はあまり耳にしない印象ですが、幸い大きな災害につながらないだけで、ため池の被害は数多く起こっています。地震による被害もありますが、平成26年から令和5年までの10年間だけでもため池の決壊は320事例もあり、そのすべてが雨によるものでした。平成30年7月豪雨では32か所の農業用ため池で決壊が起こり、広島県でひとりの方が亡くなりました。

農林水産省の調べでは、全国のため池の総数は15万1千か所以上もあり、このうち決壊した場合に下流への影響が大きい防災重点ため池は5万3千か所以上あります。

ため池の危険については、次のような点が指摘されています。約90%のため池が、作られてから100年以上が経過しています。古いものでは200年、300年も経過しているものもあります。さらに、ほとんどのため池の管理が集落や

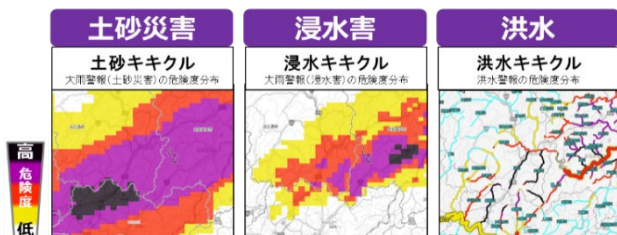


個人、あるいは水利組合、土地改良区といった公的機関以外に任されており、農業を取り巻く環境の変化などによって安全面の管理など十分に把握できていないものもあります。また、小高い場所にあるため池が多く、社会環境の変化などにより、ため池が決壊した際に危険が予想される下流部に住宅や施設などが建てられている場所もあります。農業用ため池を管理する農林水産省では管理や保全、防災工事などに関わる法律の整備を行い、ため池の防災に力を入れています。ため池のハザードマップの作成も進んでおり、国土交通省の『ハザードマップポータルサイト』で各地のため池のハザードマップを見ることができます。

梅雨が明けたあとも、盛夏期から台風期が終わるまでは大雨の危険は続きます。改めてため池の災害防止にも目を向けておきたいものです。

3 気象庁ホームページは「宝箱」

防災対応に携わっている方は、大雨時などは気象衛星ひまわりからの画像や気象レーダー、アメダスなどをフル活用されているのではないかと思います。気象庁ホームページでは、気象庁が発表するほぼすべての防災気象情報を確認することができます。つまり、気象庁ホームページを見ただけでも、災害対応を行ったり災害を避けたりすることが十分可能です。ただ、情報量が非常に多いため、一般の方にとっては、使いこなすことが難しいかもしれません。そのような皆さんにお勧めしたいのは「キキクル」です。これは、土砂災害や洪水害などの災害リスクが高まった際に、地図上に危険度を色分けして表示してくれる、非常にわかりやすい情報です。さらに、気象庁ホームページ



ジには、地震や火山の情報、波浪や潮位などの海洋に関する情報などもあります。一般向けの解説や広報資料、子ども向け質問コーナー「はれるんライブラリー」もあります。専門家向けには数値予報天気図や高層天気図、専門書に匹敵する解説資料なども揃い、自分で天気予報が出来るくらい充実しています。

6月号でも気象業務150年にふれましたが、気象庁ホームページでは150年前のデータも見ることができます。例えば東京の150年前の1875年8月のデータを見てみると、月平均気温が24.9℃、月平均最高気温が29.4℃でした。昨年(2024年)の東京の8月は、月平均気温が29.0℃、月平均最高気温が33.6℃にもなっており、気候がかなり変わっていることが一瞬でわかりました。ちなみに1875年の東京は、現在の秋田(月平均気温25.0℃、月平均最高気温29.2℃)とほぼ同じでした。

このように、気象庁ホームページは、気象に関するありとあらゆる情報が詰まった「宝箱」のようなものではないでしょうか。



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望などございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22口ーヤル若葉105号
http://www.npo-cemi.com/center.html

☎ 03-3359-7971

📠 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

